

「言語を通して世界の平和を」は京都外国語大学建学の精神です。世界の人々が平和を維持するには互いの理解が必要です。たとえ困難であったとしても、人はその努力を止めてはなりません。ここでの理解とは、ただ単に「知識を得る」というだけではなく、互いに「理解し合う」ための努力を続けるという意味です。そして、「理解し合う」とは、多様性 (diversities) を認め合うことを意味します。文化の独自性を尊重することはとても大切なことです。そして、それと同様に、それらの独自性を超えた共通性 (commonalities) を「認識し合う」ことが求められています。

人は、地球の平和を持続させるために何をすればいいのでしょうか。人類は言語を超え、文化を超えて理解し合えるのでしょうか。そのために必要なことは何でしょうか。世界の教育が果たすべき共通の役割はここにあると考えます。それは、どのようにすれば、私たち一人ひとりの心のなかで多様性を認め合う世界が共有できるようになるか、だと思います。「言語を通して世界の平和を」の建学精神をかかげている大学であるからこそ、このプロジェクトが『文化をあるく：Walk Within & Beyond Cultures (WWBC)』、つまり、「文化を超える」という英語名を持ちます。そして、私たちの DVD は、そのための教材の一つとして制作されたものです。最後に、外国語を学ぶみなさんには、多言語からなる原稿 (multi-lingual scripts) を通して、言語表現をはじめ文化の多様性にも触れて頂ければと願っています。

WWBC 共同研究 代表
久保哲男 Tetsuo KUBO

「文化をあるく：Walk Within & Beyond Cultures (WWBC)」

はじめに：

以下は、京都外国語大学の教員や学生、さらには多くの市民が協働する WWBC の活動の一端を紹介するものです。この記事は、2014 UNESCO International Conference (2014 N.Y.)での WWBC 成果物 (文化紹介 DVD) とプレゼンテーション (スミス、久保) について日本語で紹介するもので、後日刊行された「実践報告」(2015『無差』)の英文骨子と併せてご一読ください。

1-1. 「建学の精神」と「平和教育」について：

京都外国語大学「建学の精神」は Pax Mundi Per Linguas (World Peace through Languages)、日本語で「言語を通して世界の平和を」というものです。大学が戦後の荒廃の中、1947年に創設された時のモットーは、二度と戦争のない国であるためには、教育、特に外国語教育が大切であるというものでした。創立者は、日本の歴史的な文化都市である京都において、若者が外国語を学び、広く世界の人々と結びつくことが、世界の平和にとって重要であると考えられたのだと思います。この度、同様の精神を有する筑波大学に協力する意味から、2014 UNESCO 世界会議に参加しました。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」(「ユネスコ憲章」前文)という広く知られた文章から始まる UNESCO の精神を尊重したいと思います。

1-2. 「実践報告」の補足説明：

「文化と自己規定」や「言語と文化」、さらには「持続可能な世界の平和」というテーマは、現在の「グローバル社会」にとって重要な課題です。違った考えや文化の人たちが集まり、意見を交わす機会が急速に増大する中で、「より良いコミュニケーション」とは何かについて、もう少し真剣に考えなければならない時が来ていると思うからです。違った文化や言語を対比する「対照研究 Contrastive Analysis」は確かに有効な手段ですが、今、「対比 Contra-」から「間 Inter-」に、そしてさらには、「グローバル global」の時代を迎えているのです。今までとは違った視点で、現在のコミュニケーションを考える必要があると思います。

「グローバル社会」においては、人は言語的、文化的、国家的な壁を越えて意志伝達することが求められます。私たちを取り巻く世界を、これまでのように「見てきたように、見たいように見てきたように」ではなく、「ありのままの姿」としてみることが求められます。比較し、対照して、ものごとをみることは間違いなく重要な視点ですが、「対比・対照する」ことは、時に両者の優劣をみることになり、「共通性」をみること忘れさせることであってははいけません。「優劣」は摩擦を生み、強制を生む可能性があるからです。だから、どんなに困難な作業とはいえ、お互いの違いが「分かり合える」ための努力が重要になるのです。そしてそのことが、「教育」の本質だと考えます。なぜなら、人は決して一人では生きて行けないからです。人はいつも他者から学んで来たのです。

しかし、自分が育った「文化」や「環境」に深い愛着を感じることは十分に理解できます。そしてそれはとても大切なことだと思います。なぜなら、台風や地震、洪水や火山の噴火などの巨大な「自然災害」によって、長く住んできた場所を去らねばならないことは、その人にとって最も辛(つら)い経験の一つだと思うからです。だから、自らの意志で、別の環境に移動する、例えば観光旅行はとても楽しいものになるのでしょうか。つまり、自分の意志に反して、場所を移動しなければならない災害は、その人にとって、とても辛い経験だと思います。それにも関わらず、人は、なぜ、内戦や戦争という「人間の行為」によって、その苦しみを倍増させようしてきたのでしょうか。

私たちが住むこの「地球」を、月から捉えた写真があります。これは、近年撮影されたもので、私たちが普段見ることの出来ない地球のハイビジョン写真です。月から出るこの地球の写真には、月の向こう側で、青く美しく輝いている地球が写っています。この美しく輝く地球を見た時、人はそれまでの「月の出」や「太陽の出」という表現に、「地球の出」という言葉を加えることになりました。これは、古代の人々が、山を越えて、別の場所に移動した時に見たであろう景色ではありません。私たちが住むこの地球の姿を宇宙から見た時、人々ははじめて遠くの宇宙からこの地球をみる視点を得ることになりました。遠い宇宙から見た「地球」は、今日も青く、美しく輝き続けます。そこには、言語・文化・国家的要因による内戦や戦争などは写っていません。まさに、青く輝く「水の惑星」だけが写っているのです。

さてここで、それぞれの個人が有する、ある種の「言語的、文化的制限」を意識する目的のために、極めて比喩的ですが、次の例を挙げたいと思います。日本語に「すし sushi」と「つなみ tsunami」ということばがあります。世界の共通語（リンガフランカ）として、他の多くの言語にも登場することばで、ある意味では、日本の風土を代表することばだと言うことができます。一方は日本の「文化」を代表し、他方は日本の「自然」を代表することばかもしれません。

問題提起はここからです。問題提起（1）：「すし」と「つなみ」という2つのことばはまったく別のことばでしょうか。この2つは、一見、全くかけ離れた単語のようにみえますが、本当にそうでしょうか。日本列島の地下に見られる巨大で複雑なプレートの動きは、時に「つなみ」という自然災害を生む一方で、その活動は日本列島のとても複雑できれいな海岸や、複雑に交じり合う大きな海流と連動します。この複雑な海底と海流が豊富な海の幸、新鮮な「すし」の材料を生むことはみなさんも知っているはずですが、私たちは日頃、自然と文化は個別のものだと思いがちですが、実は、これらは深く関連していると言えるのです。

問題提起（2）：ある国の人々がちょっと変わった食べ物を作ったとしましょう。おいしそうなマグロの切り身とマヨネーズを使い、それを「ごはん」の上に載せて、「のり」で「にぎった」料理です。彼はさらにその上に、「チョコレート」を薄くスライスしたものを載せて、「Kore wa Sushi desu. Dozo meshiagatte mite kudasai」と言って、その「sushi」をあなたの前に出しました。これをあなたは「すし」と言いますか。それともそれは何でしょうか。ちなみに、昔からの「江戸っ子」と言われる人たちは、よく、「サーモン salmon」や「ツナ tuna」は「すし」とは呼ばないよ、と言います。果たして「すし」の本当の意味とは何でしょうか。

文化や考えが多様化する、現在の「グローバル社会」においては、このような例は無限に存在するでしょう。「多様性は人々の間に混乱を導く」ので統一すべきだという考え方は、今日の「グローバル社会」においてどのように考えればいいのでしょうか。このことはそれぞれの人が考えるべきことだと思いますが、同時に、そのことこそが「教育」のあるべき姿ではないかと思えます。人は、いつも、他の人々との「意味の交渉」を通して、お互いを理解し合ってきたのだと思うからです。

「多様性の中のコミュニケーション」は、この意味で、教育の大切な部分を形成すると言えます。

ある人 (Hayakawa 1963) はつぎのように言います。「ことばはモノやコトではない。地図は現地ではない。象徴は象徴化されたモノではない。… ことばとそれが表すモノやコトとは無関係である。それにも関わらず、人はあたかもそれらが必然的に関係していると思ったり、行動したりするものだ。」つまり、ことばは現実を写す象徴として、いつも現実とともに変化しながら、私たちの心の中ではぐくまれていくものなのに、それを使って生きているヒトは、時々、それらが「同一」であるかのように思ったり、行動したりしてしまうと述べ、ふだんのことば使用に気をつけるよう注意を喚起しています。また、ある人 (Bialystok & Hakuta 1994) は、「どんなに違った言語をしゃべろうと、ヒトにはまわりの世界を描きだせる共通の要素 (意味の原初形態) が備わっている。…だから、私たちはある言語を別の言語で再構築できる」というのです。さらに、「文化」に関しては、つぎのように考える人もいます。じつは、文化とは人々の神経系の中に存在するもので、ただ単に静止した文化財のようなもの「だけ」を指すことばではないと考える人たちです。(Hall 1966)

健全な思考は「ことば」に対する意識から生まれます。「教育」は、まさに、人類が長い歴史の中で考え出してきた、そのための過程だと考えたいものです。

Walk Within & Beyond Cultures (WWBC)